岐阜県博物館調査研究報告　第35号　11–30ページ，2014年3月
Bull. Gifu Pref. Mus., Vol. 35, p. 10–29, March 2014

柳原要二が記した『日本鳥類野外観察見聞日誌』について

"The Observation Diary of Japanese Birds in the Field" by Yanagihara Yoji

説田健一[1]
Ken-ichi Setsuda[1]

[1]岐阜県博物館

要　　旨

柳原要二が，大正3(1914)年1月1日から大正11(1922)年3月20日まで，岐阜市長森細畑周辺で観察した鳥類について記した研究日誌『日本鳥類野外観察見聞日誌』の全文を紹介した．日誌には，岐阜周辺で普通に見られる鳥類の行動観察の記述が多いが，トキ *Nipponia nippon* など，現在，岐阜県では，分布が確認できない鳥類の記録もあった．また，柳原は，同好者（小野木縫之助，小木曽現八）や標本商（熊田万吉）から，鳥類の観察情報や標本の提供を受けていたことも明らかになった．

はじめに

柳原要二（1892-1961）は岐阜市長森細畑で醸造業の経営や長森尋常高等小学校の教員をしながら鳥類の研究(柳原，1918，1922a,b)や標本収集を行った人物である．

岐阜県博物館では，平成11(1999)年9月に岐阜市内の柳原家から柳原要二が明治後期から昭和初期に収集した鳥類標本1521点の寄贈を受けた．標本には，籾山徳太郎，折居彪二郎，長與鼎，高山鼎二など，当時の著名な鳥類研究者や鳥獣採集家および標本商から入手したものが含まれる（説田・時田，2001）．寄贈資料には，標本以外に，住所人名録，折居彪二郎からの書簡，研究日誌，標本収納箱がある．これまでに，これらの資料から，柳原要二と上記の鳥獣研究者や鳥獣採集家及び標本商らとの関係を考察してきた（説田，2013；説田・齊藤，2002；説田・時田，2005；　説田・小林・平岡，2013）．

本稿では，柳原要二が岐阜市長森細畑周辺で観察した鳥類について記した研究日誌『日本鳥類野外観察見聞日誌』の全文を紹介し，当時の鳥類の分布，および柳原と親しかった同好者と標本商について考察した．

日誌の概要

寄贈を受けた日誌類は全部で4冊あり，本稿で紹介する『日本鳥類野外観察見聞日誌』以外に，『大正三年　研究日誌』，『日本鳥名英和和英名　索引』『巣及卵研究』がある．『日本鳥類野外観察見聞日誌』は縦22.5cm横15.5cmの縦書きの大学ノート（図1）で，表紙の下には壹號と書かれ，「5.」と書かれたシールが貼られている．

凡　　例

活字化にさいしては，次のようにした．

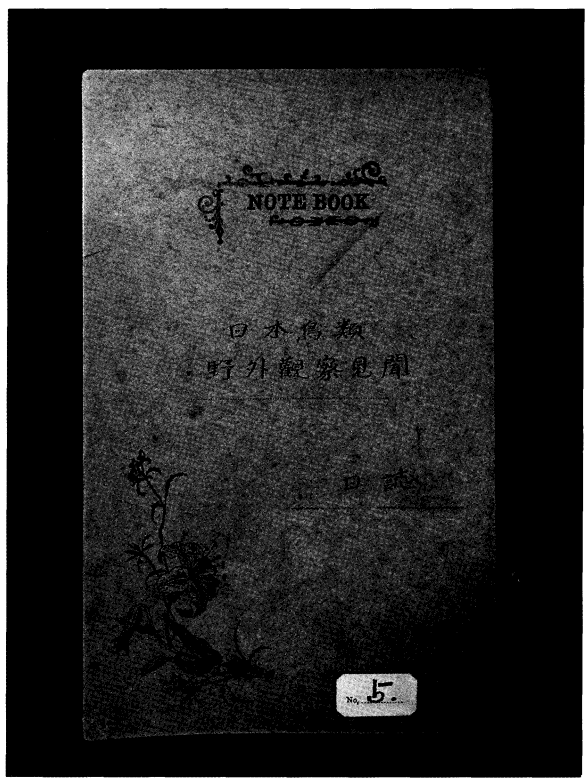

図1．日本鳥類野外観察見聞日誌の表紙．

旧漢字は原則として新漢字に改めた.

判読不能の文字は「□」とした.

誤りと思われる文字もそのまま起こし,[　]内に推測される文字を示した. また, 文意が通るように補足した部分も[　] 内に示した.

原資料で見せ消しにしている部分は, 文字が判読できるものは二重線を引いて示し, 文字が判読できないものは「●」で示した.

原資料の上部や表紙の欄外にある書き込みは, 本文と重複しないものについて, { } で括り示した.

畳字は, 該当する文字を起こした.

明らかに空白としている部分はそのまま空白とした.

句読点を適宜補った. なお, 原資料では読点「, 」としている部分でも句点「. 」とした方が適当であるものに関しては訂正している.

日付は原文通りに起こし, 和暦と漢数字を用いた.

記載されている鳥名は, 現在使われている和名と異なる場合もあるが, 原則として原資料に忠実に文字を起こした.

原資料は縦書きだが, 本稿では横書きにした.

本　　文

日本鳥類野外観察見聞日誌

モズの尾の振り方に就て

モズの尾のふり方は左右孰れに就ても内より外に向ひ円形を画きてふり又上下にもふる.

順序は不順序にして一定せず (図 2) .

大正三年一月一日山住棲にて

モズの挿餌に就て

桑樹の枝にて蛙二匹とイナゴ一匹の挿餌を見る.

大正三年一月四日桑畑にて

カラスの飛行線及飛行中の走脚の位置に就て

飛行線は直線

飛行中走脚の位置は下尾筒の内に入れ趾のみを現す

大正三年一月六日　畑にて

四十雀の二三に就て

飛行線は直線, 群をなして平常六七羽一群をなす. 鳴き声はチンチンカラカラと鳴き後にチチャチと鳴く. 庭樹の虫を探る.

大正三年一月六日　自宅にて

仝

二匹 (♂) 庭の梅, ザクロ, 椿等にて虫を探りつつあり. 土の上の落葉を嘴にてはねつけ捕虫しつつあり. 又イラの繭を食すときは及其他少し大なるものを食するときは両足にて食すべきものを抱き嘴にて破り食す.

枝より枝に飛び移り樹下より樹上に探り行く. 食を探りつつチュチュチュと鳴き又はチンチンカラカラともチチャチチャとも鳴く.

飛翔は梢直線なれども波形なす様子.

翼を二回上下にふり三回目は打合す.

枝間を飛びつつある間は頭は上下に動かし尾も同様になして少しも静止せずして食を求めつつある.

大正三年一月廿五日　自宅にて

烏と鷹？との　争を見る

午前十時頃烏と体色帯白褐色尾の先端黒き鷹と入り乱れ争ふを見る. 大分鷹はハヤブサ類であろう.

大正三年二月四日　学校にて

燕に就て

燕は歩行す. 砂粒を食しつつあった.

鳴き声はチュチュウチュウチュウチーと聞ゆ.

大正三年四月廿九日　学校にて

蒼鷺か鍋鶴か

午後蒼鷺か鍋鶴か不明なる大鳥を細畑領下沖にて見る. 八匹よりなる.

体色－白灰色

翼 (風切) －黒色

尾色－白灰色

頸も白灰色に黒帯を帯び頭まで達す. 足は黄色.

田の畦に居て魚介を漁りつつあり.

飛行線は直線, 翼を遅く上下に打つ. 地に達せんとするや少し半円を画き翼を広げたるまま地に下る後畳む. 将に飛んとするや足をまげ我等が飛ぶ姿勢をとる. 而して地を跳りて飛び立つ.

色々研究後蒼鷺と決定す.

大正三年七月十四日　田にて

晴天　華氏九十度

仝

昨日の観察時刻は十二時－二時頃まで. 今日は十一時－二時迄での観察によれば八匹の一群東方より西方に又東方に飛行す.

足は黒色らしく体は灰黒色, 翼は雨覆は体色と同じ, 風切

翼は黒色，尾も灰黒色，頸頭は白色に頭上より頸背に灰黒色の帯あり．胸は白色に黒斑を交へ，嘴は黄色体長凡そ三尺余り．

飛翔のとき尾は広げる．飛び立つとき鳴声一声聞ゆ．　キャー．

大正三年七月十五日　田にて

背黒鶺鴒稲田に捕虫す

午後二時頃に二匹の背黒鶺鴒稲田に来りて刈株の間をしきりと探しつつ捕食しつつあり．何虫を食するか．

大正三年十一月九日　田にて

鳩の卵に就て

日頃六年級の天井に鳩巣をかまへて毎日教室に糞を下す故に鳩を取る．

大工森方助梁の間の数ヶ所を出入口として居れば之れを閉じんとして天井に上る．其節採集を依頼す．

幼鳥七八羽，卵十個以上内卵六個完全に得たり．

巣は三個，柳（糸柳）の枯枝にて薄く製せられ他に枝に固くついた土，糞共製の三個の巣ありと．

卵の縦，横の測定

縦	三九ミリ	横	二九ミリ
	四一		三〇
	四一		三〇
	四〇		二九
	四二		三〇
	四〇		二九
平均	四十.五		二九．五

卵色は白色にして一巣に二個づつ産卵す．

大正三年十一月卅日　学校にて

鳩の巣の材料に就て

先日研究したる鳩の巣の材料は柳にあらず，ハリエンジュの葉柄の枯しものと訂正す．

大正三年十二月九日　訂正

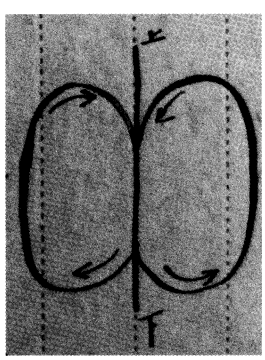

図 2．モズの尾の振り方．

四十雀の捕食に就て

午前十一時丹羽の松の皮をむく．何か喰へてヒサカキの枝に行く．下に落とす数回之を行ひ後去った．行きて見れば松虫の幼虫形状少しも変せず死状になりて居る．皮片にてつつけば動く．如何にしたか？

幼虫は松樹皮中にひそみ居りしを鳥の眼の如何に力の強きかを知る．

樹幹を下方より上方に登り進む．

大正三年十二月十三日　自庭にて

朝の鳥の二三に就て

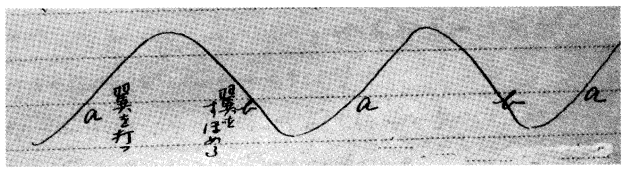

図 3．黄鶺鴒の飛翔線．

朝境川の橋上に少しただずめば夢さめたる数匹の四十雀ヨシの中に捕食しつつあり．チチと鳴き一匹がヨシの幹上に止まり，しきりに捕食せんと探りつつあるときに他一匹之れをねたましく思ひしかしこに飛び来り先の一匹を追ひ払ふ後ここを探りつつあった．

中に鶯二匹ばかり居ったが四十雀に追ひ回されて居った．

ショビン川面を掠めて直線にとぶ．

黄鶺鴒の飛翔線は左図（図 3）の様に観察せらる．

大正三年十二月十六日　龍天橋にて

鳥の卵巣に就て

小木曽源八氏の寄賜である．

村の権現神社の松上より同人採集す．

巣の直径凡そ五〇ミリ，高さ二二〇ミリ，材料は木枝，シュロの毛，藁，蔓類，人の毛等．

卵数五個，色は緑色に褐色の斑点あり．

卵の測定

縦	三二ミリ	横	五〇ミリ
	三二		五〇
	三二		五〇
	三二		五〇
	三二		四五
平均	縦　三二		四九

鳥はハシブトガラス？

大正四年三月廿二日　自庭にて

メジロの友情に就て

源八氏が捕へし一羽と叔父が空気銃にて捕へし一羽とを共に一籠中に入る．一羽，友の傷口の毛よりくれ居るのを嘴にてつつきなをしてやろうとして居った．平気でなすままにして居った．友情の深きを知る．

メジロは羽毛を大切にするものである．

大正四年三月廿二日　自庭にて

夕方観察の一節

夕方一種の鷹と烏の争ふのを見る．鷹類と烏とはよく争ふ．何かの原因か

大正四年十一月廿八日　龍天橋にて

モズの稲を捕食に就て

新加納へ行った帰りに新加納坂下でモズのしきりに稲刈株中にて虫を捕食しつつあるのを見る．

大正五年一月廿六日

鶯に就て

三月上旬頃より毎日庭に来り午前中鳴く．

一種の蛾を身体のみ食するのを見た．

大正五年三月廿一日　自庭にて

連雀に就て

東門外のカナメガシに紅連雀居りて余の行きしに驚きて飛び立つ．栗樹の枝に止る．カナメガシの果実を啄み食しつつありしを知る．

余の下に居るためしきりに下を見て物ほし顔，余隠れば下りて来て啄い食す．余捕へんとしにチューチューと声を残して去る．

大正五年三月廿二日　自庭にて

モズの造巣に就て

新家の竹林中に地上凡そ七尺の所に六個の卵を有する巣を発見す．

源八氏の話によれば二三日に孵化すると，成程内に手を入るれば今少し前に親鳥の立ち出でしものと考へらる程の熱がある．此の巣は前日シキミの樹間に造巣せしを唯[誰]か盗卵せしか又他の事項の為めか竹藪中に変更せしものと考へらる．其の当時巣中に二卵ありしと孰れも源八氏の言である．

大正五年三月廿二日　新家にて

仝

竹藪中のモズの卵巣に就きて研究せよう．

三月廿二日　発見　午後四時頃　卵数　六個

産卵後一週間余を経ると考へらる．

一日に一個産卵すとすれば六個なる故六日は経たり．親鳥捕食に行きし後巣内を観察す．

異形の卵は混じ居らず，皆モズの卵．色は鈍端に密に鋭端に粗の淡褐色の紋点あり．地色は白色．巣は地上より凡そ七尺．

三月廿八日　午前七時　十一時　午後二時頃の観察

親を巣より追ひ出し其後の有様を見る．♂♀共に互に巣の近くに来り心配げに見る．抱養する親は♀にて♂は巣の近くに有り．

親の巣中に入らんとするや一二回巣の上枝に止り巣中の有様を見る．然し後に巣中に入る．其の巣に入るや下方よりすること二回ありし故，よく観察せしに左様な特性もないらしい．

雌を巣より追ひ出せば雌は雄に話せしか雄直ぐに飛び来り，幾回も巣の近傍に来り巣の有様を見る．安全と見れば雌をして巣に入らしむ．

雄が安全と見れば雌の居る近くに行きキチキチキチと声低く鳴く．雌は之れを聞きて巣に入る．

以後病気の為め観察不能．全治の後見れば成長して大なる幼鳥となり居った．

コムクドリに就て

新家の松の木の枝に多々集りて果実を啄食しつつあるのを見る．二十五羽ばかり，夏期本邦にて繁殖し今頃キュキュキュと鳴き群を為して飛ぶは此類か？

大正五年八月廿三日午前十時観察　新家にて

トビに就て

一羽空中に在り輪を書き飛行線は輪形，或は直線，東南に去る．右巻輪の多し時は東南風，其の時右側に尾翼を斜にす．垂下のとき翼をすぼむ．然して落ちるが如くに直下す．

大正五年十一月六日　午後二時　□の桟にて

ウグヒスに就て

一羽ヒサカキに居る．樹間を飛びあるく．捕食す葉裏に虫居り嘴のとじかざるときは飛びながら捕へ元の場所へ帰る．チャッチキと早く鳴く．

大正五年十一月七日　午後三時　自宅にて

仝

一羽のウグヒスがモズに追はれチャッチキと鳴き樹間を逃れ回るを見る．モズは餌にするためか疑問．遂に捕はれず．

大正五年十二月九日　朝　自宅にて

トビに就て

凡三十匹列をなし東南より西北に進む. 両翼を広げしまま直線上に進む.

大正五年十二月廿九日　午後四時頃
華氏三十三度　西北風強く
雪空　細畑街道上にて

モズに就て

一羽雀の三匹の所, 寄進み来り. 逃るを追ひ程なく又来る. 捕へることなし. モズの滑走するや両翼を十分に広げ尾を斜さにして凡そ十間離れたる木より木に水平に行く. ♂らしくあった.

大正六年一月五日　雪後晴午後四時頃
自宅にて

仝

畑の桑樹中の立竿等に止り居りて何か探りつつあり. 稲虫を食するか午後二時観察.
飛行は殆ど直線, 二三回小さく翼[羽]ばたきして後大きく打って翼を体に付く.

大正六年一月十三日　曇後少雨
学校にて

クヒナに就て

川岸に一匹の歩める見る. 余を見しか後に方向を転じ川岸より川面を掠めて直線に（翼を体に明に付けず）飛行し五六間彼方の川岸の浅瀬の水中に下り水を渡りて又川岸の葭中に隠る.

大正六年一月十五日半晴寒し.
細畑地内境川沿岸にて

四十雀の鳴声に就て

鳴き声はチュチュカァカァー‥‥
チュチャチュー‥‥
チンチンカラカラ　　と聞ゆ.

大正六年三月十七日　晴　自宅にて

モズの巣に就て

孵化日数其他の研究
場所は新家のシキミの枝中.
地上より凡そ五尺の高さ.
薮影に在りて一日中凡そ日光あたらず.
巣の材料は藁にて外廓を造り其れに白糸等を附着せしむ. 然して内側にはシュロの樹皮を以って造る.
卵数は五個.
卵色は白色にして淡暗褐の斑の粗に点在す.
観察始日は小木曽源八氏の言により観察始む. 源八氏の発見せられし時は四個の卵ありしとのことである. 然れども余一日後れて十八日に観察せしに五個産卵し有り. 依って一日に一産せしものとすれば初産より今日までに六日を経せし事を知る. 故観察始日は三月十八日である.
三月十八日　午後二時観察　晴れ
卵五個, 親鳥巣に戻らず余帰るとき薮中にて鳴くを聞く.
三月十九日　午後四時半観察　雨
始め観察に行きしとき親鳥居らず故に巣を見捨しかと思ひしが巣を離れて観察せしに親鳥二匹来て巣の近くに来り, 又飛び立った. 之れ巣に異状無きかを見たのである. 程なく♀らしき親鳥地上極く低く来りシキミの株本に行き静に巣中に入る.
卵数は五個にて異りなし.
三月廿一日　午前八時観察
♀らしき親鳥の一羽暖めつつあるのを見る.
側の樹上に♂居りて警護の任に出る. 余の近きしときキチキチと鳴き, 敵の近づきしを知らしむ. ♀巣より逃れ去る.
午後二時の観察に余巣に近けば前の如く♀巣より逃れ去る. 故に内を検せしに五個の卵の内三個孵化し居れり.
体は赤く黄色にして毛を被らず.
眼は開き居らず.
観察中はよく動き居たり.
程なく♂来りて余の頭上巣の上の枝（他樹の枝にしてシキミの枝にあらず）頭上より凡そ一間の所に止りきづかはしばに巣中をのぞき又余を見て居る.
其の時尾をしきりに左右上下に動かしつつ低くキチキチと鳴き居たり. 観察之限りに止む.
三月廿二日　午前七時観察
巣に近れば♀は巣より逃れ出づ.
未だ開眼せず.
三月廿三日　午前七時観察
前の通にして観察することを得, （以後略して要項のみ書く.）
残り二匹孵化す.
三月廿四日－廿六日
別に変化なし.
三月廿七日　午前七時観察
目は大方は開くことを得, 筒毛も発生して羽域明となれり.
三月廿八日　午後三時観察
殆ど目に見へて成長し毛も長くなる.
親鳥二羽心配げにキチキチと鳴きて余の観察中巣の上を

去らず．巣中の様子を見て居たり．
親鳥一度鳴けば巣中の雛は体を縮めて互に小さくなり隠れんとす．
三月廿九日　午後三時観察
見違へる程大きくなり毛も大に成長し目は観察中開きたるもの閉じたるもの一様ならず．巣中に手を入れれば大変に暖なり．
今日は北風にて寒き日なりしなり．
キチキチと鳴きて巣の近くを去らず．
三月卅日　午前八時観察
著しく成長す．
三月卅一日－四月二日
別に差したる変化なし．
四月三日　午前八時観察
著しく成長し殆ど毛も生へ揃ふ．翼の毛は筒元に着す．
余巣に近き一羽死したる有様なる故ちよと手をふれしに一羽を残し（死したる有様のもの）他は四羽共巣より飛び出て飛散す．これ迄で成長せしとは驚く．
親鳥はキチキチとやかましく鳴き巣近く来り心配げに見る．雛に警固の鳴きか？
余雛を探し出し巣に三羽入れてやる．然れども皆飛び出す．先より残りの一羽も知らぬ内に飛び出す．
飛行の力は弱く殆ど不能なれども早く足にて飛び行き木葉の間に隠る．雛の体色と周囲の物色と殆ど同色故見出すこと困難なり．
以上の如く大に混乱されたるを以って之れにて放置した．
親鳥はキチキチと鳴きて余の頭上にて暴行を責むるに似たり．
モズは孵化後丸二週間にて巣立するものと観察す．
何を雛に与へか観察の出来得なかったのを残念にした．
四月十一日　午後二時観察
余が巣に近ずくや親鳥チュウチュウチュウキチキチキチと強く鳴き居る故巣中を見れども卵なし．近くに成長せし二匹の雛の雑木の繁より飛び出で親の方へ飛び行くのを見る．五匹の内二匹のみ成長せしか．
之にてモズの観察終り

燕の渡来日に就て
午前の時初めて燕の飛ぶのを見る．
大正六年四月八日　細畑街道上にて

鵙の挿餌に就て
三月庭ニテトカゲの挿餌を見る．二三日後にて見れば無し．食せしか？
大正六年四月十二日　自宅にて

雀の捕虫に就て
雀の田，畑，道の土手等にて何か捕食してあるのを見る．道の土手下より余の近きしとき飛び出てし一匹の雀は明には見へざれども地虫を口に咬へ居たり．
大正六年四月十五日　細畑の地内にて

烏の鳴き声に就て
烏の鳴くやガァガァと首を上下にして上のときガ下の時アーと鳴き稲の刈株の近く又刈株を歩みながら何か探してあった．
大正六年四月十五日　細畑地内にて

ムクドリに就て
三日間毎日街道の松に二匹ムクドリ朝八時頃鳴き居るのを見る．
キーキーと鳴く．
秋冬の季節の時も常に多数居るのを見る．
大正六年四月九日細畑地内街道松恵比須神社前にて

ムクドリの巣に就て
十九日観察せしムクドリの件今日小木曽源八氏の言葉によれば恵比須神社前の松のムクドリは造巣中なりと．
又杢兵衛方の前の松にも造巣中なりと．
笠松八幡神社にも造巣中にて一巣に五六羽居ると．
大正六年四月廿一日　見聞による

朝の観察に就て
新家の竹藪中にてアカハラツグミ♀らしき鳥一羽見る．
前の街道にムクドリ一羽♂居り，囀りつつあるのを見る．
大正六年五月八日　新家にて

何鳥の鳴き声か
午後九時頃キャァキャァと鳴く声を聞く．ツグミの鳴き声か
大正六年五月十三日　室内にて

仝
午後九時頃カァカァカーと鳴く声を聞く．
大正六年五月十八日　室内にて

コカワラヒワの造巣に就て
新家の高き松の木にコカワラヒワの巣有ると源八氏言はれし故に観察にかかる．
只，糸，藁，等にて少し造りかけしのみ．何か邪魔せられ

止めし様に見ゆ.

大正六年五月廿日　午後三時観察　新家にて

アヒルの習性の一つに就て

新井歯科医へ行く途中美江寺町にて雌雄二つがひのアヒル（殆どマガモに同じ一寸の異りたる処なし．或いはマガモかも知らず）溝の泥中をガァガァと鳴きながら何か食しつつありし故二人の男の子供小石を之れに投ぐ．雄一羽頭を下にさげ物をねらふ様にして速にその子供の方へ進み向ふ．子供は一散に逃る．之れ習性の一つか．アヒルの溝水を吸ふや嘴端より吸ふて側より水をほとばしり出す．其勢甚た盛である．

大正六年五月廿三日午前九時観察　美江寺町にて

雀の捕食に就て

雀が柳の樹皮間に有る袋蜘蛛様のものを啄み食しつつあるのを見る．

大正六年五月廿六日　学校にて

ムシクヒの鳴き声に就て

ムシクヒの鳴き声は

チチチチュウチュウチュウチーと聞ゆ．

大正六年五月廿七日　自宅にて

朝の観察に就て

朝細畑地内の街道の南に沿った沼田より白灰色の鳥一羽飛び立つ．アジサシ類にあらざるか．

大正六年五月廿九日　街道にて

ホトトギスの鳴き声に就て

午後九時頃ホトトギスの鳴き声を聞く．キュンキュンキキュクと聞ゆ．

大正六年六月一日　室内にて

烏の飛翔中の呼び声に就て

晩天を仰いで見ると三匹の烏が南より北に進み行く．一羽は凡そ十間ばかりはなれて二羽は殆ど一同になりて行く．先の烏カァーと鳴けば後の烏之に答へて同じく鳴く．若し後の烏の返答泣きときは数回も秋て返答を求む．親子なるか否や一寸と面白く感じた．

大正六年六月廿一日　自宅にて

鳥棲居の範囲の話

昔山仕事をした人の話しに人里より三里山奥には何も居らないと．一里より二里までの間多くキジ，ヤマドリは今頃行くと闘ひて居ると労れたものを手取りにする事を得と．三里以上になると何鳥も見ないと云ふのは一寸と受取れないが，然し之をも種類による．雷鳥等深山に居る．

大正六年八月廿二日　聞見による．

背黒セキレイの斃死に就いて

朝自宅の街灯の下にセグロセキレイ（幼）雄の上顎骨の額面の所より折り斃死居たるを見る時体温尚有り死してより間もなきを知る．

大正六年八月十九日　街道にて

山雀に就て

日頃山雀の鳴声を聞きしが今日四羽我家の上を東より西に飛翔し，飛翔中ピーピーと高く鳴きて飛ぶ．飛行線は稀に波状を呈す．

ムクドリに就て

日頃ムクドリの群多く見る．唐ムクドリかムクドリか観察とじかず．

見始めは九月十日なり．

大正六年九月廿四日　自宅にて

ムシクヒの捕食に就て

昼頃ムシクヒのヒサカキの間を捕食しつつあるのを見る．介殻虫を探りつつある様に見受けた．

大正六年十月二日　自宅の庭にて

燕を見し最終の日

今年中にて燕を見しを最終は今日であった．即ち十月十三日午後三時頃．

大正六年十月十三日　街道にて

ヒヨドリを初めて見た日

午後一時ヒヨドリの飛翔を見る．二三回翼[羽]ばたきして後，翼を体に付ける．翼を体につけた時キュウと云ふ声を出す．キュウキュウと鳴き西より東に行くのを見る．

大正六年十月十四日　自宅にて

四十雀を初めて見た日

十三日の午後三時二羽の松樹にて鳴きつつ捕食しつつあるのを見る．

大正六年十月十四日　自宅にて

モズの捕食に就て

モズが何か喰へ来り松の木の頂上に止まりし故熟視すれ

ばイナゴを喰へて食せんとしつつある処であった.

燕の一種に就て

近日末六七羽の燕形の鳥我家の上近くを飛翔するを見る. 何種なるか明かならず. 然し体色は黒色にして腰に白帯有る処より見れば岩燕にあらざるか.

本日も朝一羽を見た. 岩燕にしては珍しきことなり.

大正六年十月廿九日　自宅にて

ユリカモメの食物に就て

二羽のユリカモメに就て食物を調べしに多数の川魚, 目高を食し居たり. 多分長良川産らしくあり.

大正七年一月三日　自宅にて

クヒナに就て

午後下男境川川岸の竹叢中にてクヒナ一羽を発見し捕獲せんとして得ざりきと. 足下より飛び立たせ残念したと. 体色土色にして保護色を有すれば発見し難きなり. 余飛翔して川岸の蘆中に隠れしを見る.

飛翔線は直線にして翼を上下に早く打つ. 高く飛ばず.

地上凡二三間の高さ. 雪降りの午後未だちらつきたり.

大正七年一月八日　境川川岸にて

朱鷺に就て

十五日, 長森小学校卒業生の一人美濃武儀郡神淵在にて採集されしを購入し, 寄附さる. 其の測定観察を左に記す.

曲尺にて

体ノ長　二尺三寸八分　尾ノ長　四寸九分　翼ノ長　一尺二寸三分

嘴ノ長　六寸七分五厘　広張ノ長　四尺七寸　会合線ノ長　五寸八分

頭ノ長　一寸二分　脚ノ長　二寸六分

趾ノ長　後　九分　内　一寸六分五厘　中　二寸二分五厘　外　一寸七分五厘

嘴ノ色　上下共黒　上嘴ノ先少しノ間赤に黒を加ふ.

其の裸出分赤橙黄色

脚ノ色　褐色に所々に黒を加ふ.

趾ノ色　右に仝じ.

爪ノ色　淡褐色に黒を加ふ.

虹彩ノ色　黄赤色

其の他　胃中に馬蛭一区[匹]ドジョウ一区[匹]タニシの小形なるもの一個其他殻の細片多数有り.

尾羽ノ数　十二枚　腸線ノ長凡四分（雄）

大正七年一月十八日　学校にて観察す

ヒヨドリの飛行線に就て

翼を打ち稀に波状にしてキュウキュウと鳴き飛ぶ.

大正七年一月廿日　自宅にて

椋鳥の群の害

二百余町を荒す.

保護鳥だから捕る訳にも行かぬ.

本年は各地共に降雪多くために禽獣の食餌を失うて人里に近く彷徨すること往々見聞せるが尾張西春日井郡枇杷島町附近にては近来多数の椋鳥麦畑に飛来し麦の発芽を喰散し中には根元より丸坊主にならしむのあり.

被害の段別は既に二百廿一町歩に及びて一段歩にて半俵及至一俵の減収を免れざるべく其の被害額一万三千余円と計上されたり. 然るに椋鳥は保護鳥なる為め之れを捕獲すること能はず. 農民は非常に困難しつつあり. 斯ること是れまでに例なきことなりと云ふ.

大正七年一月廿一日　大阪朝日新聞記載の抜書による

鶯の初音

今朝鶯の初音を庭にて聞く.

大正七年三月廿日　自宅の庭　朝にて

メジロの飛翔線に就て

翼を打つ故正確に直線とは云へない. 然し殆ど直線である. 翼は連続的にあらずして断続的に打ち飛翔す.

大正七年三月廿四日　晴　自宅にて

燕を見し最初の日

今朝朝八時半頃初めて燕の飛行するを見る.

大正七年四月一日　晴　街道上細畑地内にて

トビの飛翔中翼の動き方

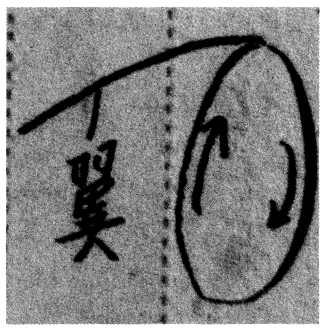

図 4. トビの飛翔中の翼の動き方.

翼は前下より後ろより前に回転しむる様に見る（図 4）.

大正七年四月十三日　曇　街道上にて

烏と椋鳥の争に就て

朝街道の松並木昨年造巣せし松に二三日前より椋鳥造巣して産卵せし有様であったのに今朝椋鳥の声やかましき故ふと上を見れば一羽の烏（ハシブトガラス）来りて椋鳥を追ひ回して卵とでも取らんとするか．烏対椋鳥の争ひ，椋鳥敗けて逃れば烏産卵穴に右足を入れてかき出すが如き様をする．然し何も得ずして去る．それより椋鳥は一回も見なかった．

大正七年五月五日　街道上にて

セキレイと鳶の争ひに就て

朝，今にも雨の降らんとするとき北より一羽の鳶の後よりセキレイ（何種なるか曇天にて眼力明ならず故不明）の波形の飛翔しつつ又鳴きつつ追ひ来るを見る．

鳶がセキレイの雛又卵でも食せしか不明なれど何か事の有りしことは確である．前後になりてセキレイと鳶の争ひを見る．

セキレイは気立ちて努[怒]りたる様子なれども鳶は平然である．

大正七年六月九日　午前十時　自宅にて

仏法僧ノ名所に就て

愛知県南設楽郡鳳来寺山は高野山と共に仏法僧の名所なるが昨今盛に鳴く季節なるより長篠古戦場見物旁仏法僧を聴きに出掛ける人少からずと．

大正七年六月十三日　大阪毎日新聞より抜書による

燕に似たる一種の鳥に就て

朝七時頃北より南に一種の燕に似たる鳥飛ぶのを見た．日頃人が云ふ海燕か．然し異なりたる鳥であらう．曇天にて今にも雨降らんとせし日なれば只下よりは黒く見えしのみ．又日頃沖田にて捕食するとの事なれば研究観察せよう．多分アジサシ類ならん．

大正七年六月卅日　自宅にて観察

仝

午後四時頃沖田にて観察す．

場所－細畑より野一色に通ずる里道．

匹数－七羽

体色－背，両覆灰色

尾　白色扇形

頭上黒色　其他不明

飛行線－直線

捕食せんとするや或一定の所に翼打ちして留まり餌を見出して急に翼をすぼめ真直に落とす．其の場所は田地の稲苗の水田中故水を飛上りビタンと音す．其捕食の有様中，敏速，何を捕食するや不明．捕食せんとするや常に前方に向へる嘴を真下にして探しつつ翼打ちをする．

大正七年七月七月八日　細畑地内里道にて

仝

東南の風強く観察不能

大正七年七月九日　畑道にて

一種の鳥に就て

今日此頃毎夜家の近くに盛にポッポウポッポウ･･･と云ふ鳴声を聞く．

何鳥かフクロウかミミヅクか観察不能．

世人はポッポウが鳴くと云ふ．フクロウと云ふが如何に．

又，午後十時頃，桜樹に一種の鳥来りキキュウクキキュウクキキュウクと鳴く．鳥形はフクロウよりは小形耳は不明アヲバヅクにあらざるか．後日の研究を要す．

大正七年七月廿二日　夜　快晴

満月に近し．

{小木曽源八君の言によればポッポは体細くフクロウよりは小形にしてミミヅク等よりは体黒し．耳なし．右の有様より考ふるときはアオハヅクならん．然し正体を見ず故に正確とは云い難し．

大正七年七月廿七日記す}

ヨシゴヰの巣に就て

午前中岩田実君児童と共に野外観察に行く．

児童シヨの巣なりと云ふて卵四個を有する一巣を持ち来る．余もシヨの巣なりと思ふ．

五六の巣ありて児童各巣を破り卵を無意に卵を取る．其の数多し．

一巣の卵数は七－三までなりと．

余放課後堀松雄（児童）等と採集に行く．

場所は羽島郡三宅地内野中堤防の南側の二ツの池．

二ツの池は東西に凡そ一町も離れてあり．孰れもヰ，マコモ等水生植物を以て池岸に群る其の中に目的を採集す．

西の池にて二個の巣を採集す．孰れも卵は三個を有す．

孰れもヰの上に有り．ヰを四方よりヰの上方を折りまげ合せ其の上にやはりヰにて巣を造る．水面より凡三四尺，孰れも水中に生ずるヰ上に有り．

東の池にては先程児童乱取の結果の所に跡を残せるのみにて一個も採集し得ず．

二三羽の巣の持主の見るシヨにてはあらずヨシゴヰにてあった．

其の観察　頭上黒色

頭上より頸後まで黒色

頭側より頸側背等にかけて黄褐色.
あごより腹にかけて白色.
嘴上は褐色の様.
下は黄褐色.
脚は黄褐色.
脚は黄褐色.
趾は黄色.
翼は風切（一，二，風切）黒色，三，風切は黄褐色の様に見ゆ.
飛行線は直線かなり早く翼を打つ（上下に）.
以上等より観察すればいよいよシヨにあらざるを知る.
児童が採りし卵巣はめちゃくちゃにして或は破り或は捨て三，四，卵児童より貰ひ受く.
採集巣中一個を学校に残し二個は研究のため持ちかへる.

大正七年七月廿六日　晴　自宅にて書す.

仝

午後今日も観察に行く.
児童一卵を手にするを見る.昨日観察せし所のすぐ西にて採りしと.よく見ればなる程粗末な巣を造りて此に産卵せしのである．只一個なりと.
これは東の池にてのことなる.
西の池にては何も採集せずと.
西の池の北岸の中程の処,昨日三卵を有する一巣を採集せし所の隣に巣の造り初めらしき跡よく見へて二羽のヨシゴヰの其の近くより二回も飛び出しを見る.後日の観察を用す.
親は昨日の観察と大差なく尾の黒色の様にも又体色（黄褐色）と同じ様にも見ゆ．正確に観察を要す.

大正七年七月廿七日　半晴　自宅にて書す.

背黒セキレイの初見に就て

今日ヨシゴヰ観察に行き,帰り中印食地内堤防にて二羽の背黒セキレイを初めて見る．今年の初見なり.

大正七年七月廿九日　半晴　自宅にて書す.

ヨシゴヰに就て

前の続き.
午後一時頃観察に行きしに西東の池より二羽飛び出すのを見る.
尾は黒色.
一個の産卵巣を見ず．巣の初めらしきもの二個見ゆ．然し放棄されたる様である.
其他に著しき点を見出さず.

大正七年七月廿九日　晴　自宅にて書す.

小椋鳥の群

午後四時頃西方より東方に一群凡百羽と二群凡七八羽つづの一団飛翔するのを見る.鳴声は孰れもキュウキュウと聞ゆ.

大正七年九月四日　曇時に少雨有り．自宅の庭にて

二三の鳥の観察

午前十時頃三宅地内の池にて二三の鳥を観察す.
カハセミを見た．体色は冬色と大異なし.
池端の葭に止まりしきりと何か見つつありし様なりしが直ちに直下に下り，何か捕へ他の黄の枝に止まる．初めてカハセミの捕食の様を見た.嘴が長大にして何となく不釣合の様に見た.
又
胸より腹迄で白色他は皆褐帯暗紫色のアジサシ形の鳥一羽池の北端より飛び出て南へ一直線にキキュウキュウキュウと鳴きつつ翼を二三回小打して大打し体につけ行くのを見る．何鳥か不明.
又
川岸の柳の樹間にてオホヨシキリの毛虫を補食してあるのを見た.

大正七年九月十二日　郊外にて
観察地右記の通り

仝

午後一時観察地前に同じ.
今日も又カハセミを見る．十分観察不可能.
川岸の柳中にて鳩大の鳥を二三匹見る．キュウと鳴く.
体色は翼尾頭胸は灰色.
尾の端に一條の黒帯あり.
鳩には有らざるや不明なり.
椋鳥の群の来るを見る.

大正七年九月十三日　三宅地内新道川岸にて

猟人の予定数

{猟期に入る　東濃方面は盛んなり．狩猟期も追々近付いて来たので狩猟家連は銃の手入に忙しい,今県下に於る本年狩猟乙種免状を交付さるる数はざっと狩猟二千八百人で網銃猟ともに東濃方面に多い県下各署の銃猟免許予定数左の如し.岐阜一二〇，笠松二五，高須三五，高□九〇，垂井八〇，大垣五〇，揖斐一四〇，北方一〇〇，高富八〇，八幡二二〇，関一九〇，金山八〇，太田一〇〇，八百津三六〇，御嵩九五，多治見二二〇，中津三五〇，岩村二三〇，萩原一六〇，高山一〇〇，船津八五，古川六〇，銃猟二八

七〇}
上に示せるは岐阜県下猟人の予定数である. 如何に多数なるを見よ.
大正七年九月二十九日　新愛知新聞抜筆による.

ヒヨドリの渡来に就て
午後一時頃東より西に三羽のヒヨドリの飛翔を見る. ヒュウーヒュウーと鳴く. 今年に於て見し最初なりと思ふ.
大正七年十月十七日　自宅にて観察す.

ジャウビタキの渡来に就て
午前十時頃自庭の雑木林にジャウビタキの鳴くのを聞く. 之今年の最初.
大正七年十月二十一日　自宅にて観察す.

トビの群列に就て
午後四時頃東南ヨリ西北に拾壱匹のトビ列をなし~~に~~て進む. かかるときは寒気強く雪模様のときに多い. 今日も同じ気象である.
大正八年一月十四日　自宅の庭にて

ゴヰサギの巣に就て
正午頃児童ゴヰサギの卵二個を余に呉れた. 其の所在地を聞き, 観察しに行く. 場所は当村蔵前学校東の藪中カシの樹にて二巣採集した. 然し総数八個の中五個破損した. 皆孵化間近の者でありしく.
一巣三卵, 一巣五卵
巣の材料は樹の枝を集め組合せ粗なるものであると.
以上児童の言聞届.
余の観察に行きしときは漸くにして一巣をカシ樹の小枝に下より空の見ゆる程粗末なるものを見出す. 間もなく成長[鳥]の飛び出し行くを見る. 地上より凡十間の高さ其の他に一巣をもみ見出し得ず.
大正八年五月十七日　観察

雲雀の巣に就て
四月廿五日各務ヶ原へ修学旅行に行きしとき採集した雲雀の巣 (四卵) 谷間純氏より貰ふ. 然し内二個は破損して用に立たず放棄した.
草叢中有りて中に発見し得られざりしと.
大正八年五月十七日　記す.

コアジサシ？の渡来
午前十時頃校の事務室の北窓よりコアジサシ？二羽東より西へ飛び去るを見る. 緩に翼打す.
色彩等は不明なれどコアジサシ？と思ふ.
大正八年五月廿九日　学校観察.

仏法僧の名所に就て
{仏法僧の名所　愛知県南設楽群鳳来寺山は高野山と共に仏法僧の名所なるが昨今盛んに鳴く季節なるより長篠古戦場見物旁仏法僧を聴きに出掛ける人少なからずと. 因に豊川鉄道終点長篠駅より鳳来寺山下門谷迄二里の間人力車ありて登山は極めて平易なり. }
大正七年六月十三日附の大阪毎日新聞記載を抜き此に示す.
大正八年七月三十一日

小椋鳥？の来飛に就て
今日朝九時頃初めて小椋鳥か椋鳥か孰れか凡そ十羽ばかり我家の上を東よりキュウキュウキュウと鳴き飛び去るを見る.
大正八年八月十九日　自宅より観察

山雀の来飛に就て
日頃今毎日自宅の坪の内の雑木に一二羽山雀来り無くを聞く.
大正八年八月二十九日　自宅にて観察

セキレイの群飛に就て
午前十時頃一群のセキレイ東より西に我家を掠めて飛び去るのを見る. セキレイの群飛は今が初めて, 多分セグロセキレイであろう. ピピーピピーと連鳴して飛ぶ.
大正八年九月十一日　昼自宅にて観察

椋鳥の飛去に就て
今此頃椋鳥二三十羽一群となりて飛び去るのを一日に数回見る. 新家の藪中の樹に日に数回となく群居し其の鳴声やかまし. 内に小形の鳥の混じれるを見る. 小椋鳥か何か観察不明. 後日の観察を要す.
大正八年九月十八日　新家にて観察.

四十雀の飛行を初めて見る
本日五語三時頃一羽の四十雀椋の木に来りチンチンカラカラチチを鳴くのを耳く.
大正八年十月四日　自宅にて観察

燕の初見の日
大正九年三月廿八日午前中に自宅の庭上にて鳴声を聞き廿九日に確に燕なることを知る.

大正九年三月廿九日

岩燕ノ渡来

昼下印食堤防上にて二三羽の岩燕の飛び交ふを見る．是れ渡来の途上ならん．

大正九年四月廿九日　前記の所にて観察

鶫の帰路

夕方七八羽の鶫（鳥名は不明）西より来り我家の上にて北に進路を取って行く．今にも雨降らんとす．

大正九年四月卅日　自宅観察

大正九年五月一日朝曇り後晴

四月廿九日に八剣村下印食地境川沿岸の一小森に奇なる鳥を見し故今日朝の間より観察に行く．

川をへだて桑畑中より観察す．一羽の鳥あり鳴声を聞く．クワクコウクワクコウと余は驚く．確に鳴き声のみにもクワクコウなることを知らる．此の森は堤防の下に在り．故に人の堤上の行くに驚き低く麦の上をすらんばかりに飛び去る．飛行直線早く翼たきする鳩に似たり．此の森に又一巣を発見す．故に回って川岸をたより森に行く途上川岸の柳よりクワクコウの飛び出し前方の柳に止まる．良く見れば蔵品の鳥と良く似たり．いよいよ確かなることを知る．後方の道より荷車引来たり．驚きて遠方に去りムクの木に止まりしを見る．

堤防に上り森に行かば他鳥の逃れんことを思ひ麦畑中をたより行き見るにハシブトガラスの例の巣の近くの木に止まり嘴を枝にて拭ふて巣中に入り又飛び去りて前方の墓地のセンダの木に止まり程なく西方に飛び去る．

森に入り其の巣を観察するに地上より凡そ三間の高さの木上にあり．

円形にて枯枝等にて造られ木の茂みのところにあり．カラスの巣の様である．

然し産卵中の様子もあらず廃巣の様である．又は製作中か，其の所観察不明．前にハシブトガラスの嘴を拭きしこと又巣中に入り飛び行きこと等は何か．

クワクコウの巣中に産卵せいのを食せしか．観察必要．

クワクコウの観察の大要

背面　灰色．頸　白灰色．尾　黒に白斑あり．翼　黒色．

腹胸面　白黄に黒色の横斑あり．下尾筒　汚れたる白黄色．

鳴き声　クワクコウクワクコウと二回ほど続く．

（図 5）鳴き声の図解．

森の内に漸時待ちたるに不時に鳴声を聞き観察せしなり．

枝より枝に移り何か捕食の様子，此の森毛虫多し．

堤上を東より人来る．クワクコウ西に飛び去る．川岸の雑林中に入る．

飛行の始め鳩の如くバタバタと音やかましく翼打ち直線に進む．然し直ちに上向に飛び上がらず止り居る場所より下向に飛び然る後上向に直る事多し．

鳶の飛行は鼻のかゆかりしと見え左足にて左鼻をかく．いと面白し．

二日晴れ．

午前中に前記の所に観察に行く．クワクコウ居らず．只二羽ハシブトガラスのネムの木ノ小枝に止れるを見るのみ，巣は烏のものらしきなり．産卵中か製作中である．其の森にてカハラヒハの鳴き声を聞くのみ．

五羽の椋鳥の南より北に飛び行くを見る．飛行は直線三回程翼を振り四回目に体につけ連続して飛び行く．

岩燕は跡を見ず．

三日曇り後雨．

午後例の観察に行く．クワクコウ人の近くに従ひ飛び出し容易に帰り来ず．例の巣の下に行かばハシブトガラス西隣の墓地の松より飛び来り頭上にて円を書きながらガァーガァーと鳴き北の方に飛び去る．巣に二回石を投げしも何の事もなし．如何にしたるものか．

夜アオハヅクの鳴き声を聞く．

四日曇り後雨．

午前中又観察に行く．二羽のハシブト烏の森より飛び出でしを見る．余の森中に入れば頭上に来りやかましく鳴く．農夫堤上を通ず．川岸に居りしかクワクコウの森中に逃げ来たりしを見る．又人の為めに逃れ行き観察不能．遠くにセキレイの声を聞く．

コアジサシの渡来

小野木縫之助君より今日より五六の前雨上りの昨日コアジサシの西浦辺に来りたるを見たと云ふ．

大正九年五月十一日　聞きしまま記す．

コアジサシの初見に就きて

午後四時頃初めて東南より西北に飛去するコアジサシを

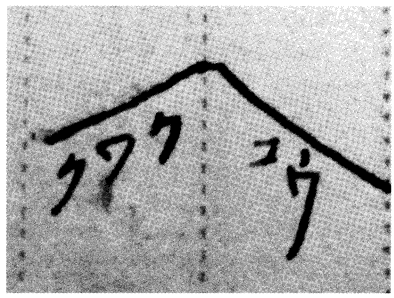

図 5．クワクコウの鳴き声の図解．

見る.

ムシクヒの鳴声に就きて

午前中庭の木にヒシクヒ来りしきりに鳴く. チチュウチチュウと弐参回続鳴しチチと鳴き又鳴き始む. 其の鳴き方は円曲である.

大正九年六月六日朝晴　自宅にて

ササゴヰに就て

午後新家の蓮池中に一羽のササゴヰの飛び出て数間先に下りたのを見る. 成鳥らしくあった冠毛も完備して居った.

大正九年六月七日の晴　蓮池の辺にて観察

{アオハヅクに就きて}

雨間に縫之助方に用件有り行く. 軒端に箱あり. 中にアオハヅクの一羽♂?居るを見る. 昨日一里塚の榎より蛇と共に落下せるを捕へしものと云ふ事は蛇の木ノ洞穴中に居りしをアオハヅクの営巣をなさんとして蛇を穴より啄り出し此に□ひ起ちて共に共に落下せしなりといふ.

箱中にてモグラの幼者を食しつつを居る.

大正九年六月十五日　聞見による

二三の鳥の観察

午前中例の八剣村の所に観察に行く. 巣は捨てられ何の抱卵せし様も見ず. 又養雛せし様も見ず.

尚クワクコウの居るのを見る.

桑畑にてホホジロの鳴声を聞きセグロゴヰの幼鳥らしきもの（成鳥とは一寸と見し所体色を異にす）森の上を南北に鳴きつつ飛び行くを見る.

九年九年六月二十日　森にて観察す

二三の鳥の事

二三日雀の雛の羽毛を啄み家屋の瓦の内に入る造巣ならん. これが今年の最終日のものならん.

夜シロハラ?の鳴き声を聞く. 南より此に行く.

大正九年六月二十四日　自宅にて

ササゴヰに就て

午前十時稲田（稲苗は無く準備中のもの）に一羽のササゴヰを見る. 余の近けるを見る前方の田の中に下る.

体－背青黒ク腹灰色.

頭－青黒ク同色の冠あり.

嘴－黒色に見る.

脚－黄色. 以上に体に就ては観察した.

習性, 耕田を歩みながら小動物らしきものを捕食しつつあるのを見る.

飛行はゆるく翼は上下に打ち直線である.

鳴き声キューと聞ゆ.

午後柳原太重郎氏より一羽♂を貰ふ. 今日観察せしものか.

実物に就きて体色の観察は野外観察と大差なし.

コアジサシの捕食の様を見る.

ホホジロの造巣, 養育してある巣, 野田にありと本年の終わりならん.

大正九年六月廿五日　観察, 見聞による

燕の鳴き声に就きて

♂♀三番の燕我家の上にてしきりに鳴くを聞く. 本年になりての囀声と思ふ.

大正九年六月廿九日　自宅にて

カハセミの飛行に就きて

ピーと鋭く鳴き直線飛行をする. 早く二三回小さく翼を打ち後大きくして体につく.

カイツムリに就きて

池のマコモ中にてピーピーピーピーと続け鳴く. 又クピクピクピクピと鳴くもあり. 何なるか, 其の内藻中より現れ出ず. 体は暗色嘴は黄色, 脚は緑色と見える.

其の内人の居るのを見て一羽余に近きものキ, キュウキュウキュウキュウと鳴けば他の二羽水に潜行, 彼方のマコモ中にて又鳴くを聞く.

二三の鳥に就きて

雲雀のリューリューリューの鳴き直線に飛びて西北より東南に行[く]のを見る.

頬白の鳴き声を聞く（畑中にて, 桑畑）

ヨシキリの鳴き声を聞く（彼方の川岸のヨシ中にて）

大正九年七月一日羽島郡三宅地内溜池にて観察)

二三の鳥の渡りに就きて聞きしまま

アトリ, シメ, イカル, エナガ等が近頃盛に金華山の東坂を北より南に渡る様聞き及ぶまま記し置く.

大正九年九月三日

小野木縫之助氏の言による

青鷺ノ渡来及小椋鳥の初鳴と聞く

今日より十日以前に五六羽のアオサギ細畑地内野寄の田中に下りると云ふ. 庭の木にて小椋鳥の初鳴を聞く.

大正九年八月七日見聞及観察

又三畝田にて三羽の青鷺を見し其後見ずと云ふ.

大正九年八月十日　聞きしまま

一種の鳥の観察に就きて

午前四時自宅の庭にて一種の鳥を見る.

東北の隅に在る栗の木より来りし様子にて円形を画きて西北の方向に去る

身は全体に暗褐にして腹部は白帯の存在に見る. 一二回翼打ち後は滑走にて飛ぶ. 鷹の様でも在り. カスヒの様でもあった. 頭は小形に見受けた.

大正九年九月四日　夕方自宅に在りて{カスヒ（ヨタカ）と鑑定する}　九月六日

モズの声を聞く

今日朝モズのやかましき声を聞く

大正九年九月九日

トビの一戯に就て

午前十時頃国勢調査宣伝の札を多数（五□）の各務ヶ原第二行空隊付飛行機岐阜市及近在の町村に機上よりまく.

時に三羽のトビ其の札を取らんとし左右に飛び回る. 其の内に一羽取りたると見る内一羽それを取らんとし此に争ひ起る. 互に逃げ回るを見る.

札は嘴でなく脚にて捕ふるのを明に見る.

一羽札をはなせば他これを捕へ又はなせば他のものこれを捕ふ.

凡一時間の後一羽捕へしまま飛び去る.

トビも国勢調査宣伝の仲間りか面白し.

大正九年九月廿一日　晴　畑にて

ヒヨドリ, 山雀の初鳴に就きて

午後田を見回りに行きしとき山雀とヒヨドリ四十雀の初鳴を聞く.

二三の鳥に就きて

同じく同時に背黒せきれいの数多くチチュクチーと鳴き波状に飛び行くのを見る. 二羽のせきれいと一羽のモズの争ふのを見る. 二羽の内の一羽モズと平行に飛び居りしが一度チーと鳴けばモズのキキーと鳴き逃れ去るのを見る.

大正九年十月十七日　午後四時頃　畑にて観察

二三の鳥の渡来に就きて

アオジ, ホホジロの鳴き声又ビンズイの声も聞き亦アトリの郡[群]を日頃見受ける.

キジバトの飛び方は見る.

二三回翼をきざみ漸時広げたるまま滑走し又元の如くして直線にかなり早く飛ぶ.

大正九年十月廿七日　畑にて観察

鶯の初声をききし日に就て

二月十三日の朝南庭の雑木中にて初めて初声を聞く.

大正十年二月十三日朝　自庭にて観察

ミソサザエの初声を聞きし日に就て

十五日の朝南庭にてコムシクヒならんしきりに鳴き居るを聞きし故観察すれば, あにはからんやミソサザヒの声であった. 後にて考へればよく似たれど声の異なるを知る. チチチチヤ・・・と聞く.

大正十年二月十五日朝　仝

キセキレイの群棲に就て

加納農事試験場農場の西の田圃中にて六七羽のキセキレイの群棲を見る. 何かしきりに啄むを見る.

大正十年二月十六日　曇昼　観察地にて

雲雀の初声に就て

右と同所同時刻に雲雀の空高く鳴くのを聞く.

大正十年二月十六日

ビンズイ（キヒバリ）の捕食に就て

朝田の畦の側にて一羽のビンズイの何かしきりに捕食するを見る. 多分地虫ならん. 二月十六日加納試験場田圃にてキセキレイと見しはビンズイならん. 多分観察の間違ひかと思ふ.

ベリカンの虹彩に就きて

動物園の来りしにつき見る. 一羽のベリカンの虹彩は黄色であった. 身体は一様に淡トキ色で脚趾踵も一様に黄灰色の様に見た.

ナベヅルの虹彩に就きて

熊田方にてナベヅルの虹彩観察は淡赤黄色に見た.

ノガンの虹彩に就きて

一羽のノガンの虹彩観察は暗赤褐色の様に見た.

大正十年三月十日記す　八日の観察事項

燕の初声を聞きし日

三月廿二日朝八時少し前一羽らしくあったが鳴き声を初めて聞く鳥の正体は見えざりしが燕でありしことは鳴き

声にて確かなり．何種ありや不明．

大正十年三月二十二日　自宅観察

メジロと椿の花に就て

二羽のメジロ赤椿の花に来りしきりに花察[蜜]を吸ふ．鳥媒花の一種と見よりして宜い．

観察日期及地右に同じ．

雀の営巣期に就きて

三月下旬頃より雀の屋根下へ鳥毛藁等を持ち込むを見る．

大正十年三月廿九日　自宅観察

背黒セキレイの巣に就て

午後三時頃背黒セキレイの巣を発見し研究用んせんと思ひつつ，□今もなく植付けることの故卵と巣を採集し来る．

発見地　細畑地内の田

場所　田のくね田にて

有様　卵は五ヶ，先端（尖面）を内に向はし　図6の様に巣中に有り．

図 6．背黒セキレイの巣内の卵の位置．

♀抱卵中にて有り．

巣の一寸側迄で行きしも何の変体も♀は見せなかった．

巣の材料は藁の腐敗したる稲の株を大く用ひてあった．人髪，糸等を少し加ふ．

大正十年三月廿一日　観察研究

四十雀の去日に就て

日頃我家の近傍の空を四十雀の鳴きつつ東北に去るのを見る．

黄セキレイの鳴きに就て

日頃彼所にて此所にて家の上にて土上にて山雀に良く似たる声にて鳴きつつあるを聞く．

大正十年四月十日　観察

背黒セキレイの構巣に就て

三月卅一日採集し来たりし地点より北方の同じくくね田畦の内にて卵四ヶを有る一巣を発見し同様の親の構巣せしものと存ぜらる．二十日余も立ちし事なれば更に造営せしものあり．

以後此の巣につき細密に観察せん．

大正十年四月廿五日　細畑地内佃地　くね田畦の中程

材料は前と同様程の刈株の藁内に少しシュロの皮の繊維少しを用ふ．

場所は畦の中間南方に向ひし　　の間，前のも南面に面してあればこれも一つ習性かと考ふ．

ときに卵は四ヶ皆央端を前方に向ふ（午前見しとき）．

午後見しときはニケ鈍端上方ニケ尖端上方に向ふ．

廿七日　午前九時頃に観察せしに卵五ヶになり全部鈍端を上方に向ふ．親は東方に向ひ抱卵す．

人の近くを聞くや巣より飛び出でても遠方に行かず五六間先きの藁の積し山にてやすみ人を疑ひ見居る有様なりしかば遠ざかりしに直ちに巣には入らずして一畦二畦東方に来り．

巣の有様を見て後巣に入る後見に行きしに前と同様東方に向ひ抱卵しつつあった．

一日に一卵産卵するものとして廿三日より産卵はじめ今日に及び巣は何日にて完全せしや計り知りかだし．大分十五六日頃より構巣にかかりしならん．

廿七日　午前中は観察．

何の変りなし．

廿九日　午後観察

何の変りなし．雨中にて大部巣は雨にぬれ居る．然し卵の部分迄は至らず．卵は度々親にて回されるものと思ふ．観察の度毎に鈍鋭端を毎にす．然し卵の位置に於ては変らず．即ち左の有様にて今日迄で続く（図7）．

五月五日　午後観察に行く．何変異も無し．

四日午前中に観察に行く．親巣に居らず．一二枚彼方の田中くね田中にて二羽共しきりに鳴くのを聞く．

七日午後観察に行く．

何とした事か．卵四ヶ一ヶ失ふ．何に食れしか孵化したる様もなし．昨日は何の異状も何かった．

~~六~~八日午前観察に行く．

近くに地鳥二羽畦の上に居り何か啄みつつある様に見た．巣を観察せしに一ヶのみ他は皆無し．

烏に啄れしものと考ふ．

此の観察は見込みなし.
近き所にてセキレイの二羽♂♀盛に鳴く. 敵せず敗亡の声が実ににくらし.
九日　午前観察せるかな一卵もなし. 抱卵主は巣を捨て去る. 巣のみ採集す.
哺育の観察失敗に終る.

大正十年五月九日

尚, ツグミの鳴き声を聞く

四月廿七日, 今尚ツグミの鳴き声を聞く.
当地方はツグミ, シロハラの両種多し.

大正十年四月廿七日　宅にて鳴き声[聞]くまくに

図 7. 背黒セキレイの巣内の卵の位置.

岩燕かコアジサシか

三羽の鳥を東より西に行くを見る.
夕方なれば明に判定し得ず. 岩燕の様な飛び方をした体一面に黒く見へた.
{縫之助の言によれば腰赤燕の由或ハ然ラン. 岩燕, コアジサ二種に似たる所少し}

夜雨降中のゴイサギの声

夜雨降りて四□方向を□せず然るときに東より西へゴイサギの鳴き声の移りつつあるを聞く. 本能にてか不思議ものである.

大正十年五月七日　自宅にて観察

コアジサシか{腰赤燕ならん}

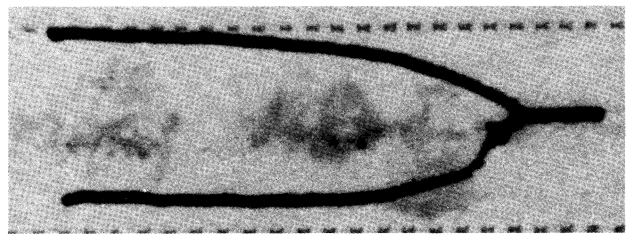

図 8. 観察した鳥類が飛びつつある時の尾の形状.

十日, 細畑六反田近[傍]にて三羽のコアジサシ様の鳥を見る. 正午頃.
十一日, 同じく正午頃, 西浦空上を十五六羽のコアジサシ様の鳥飛翔するを見る. ピーヒューと鳴く. 農夫に聞けばコアジサシだと云う. 何だか疑問.
曇天にて鳥体は明に観察し得ず.
飛びつつあるときは大方尾は (図 8) 様な形をなす. 時々尾を断ることもある. 翼を打たず滑走するときは尾は開く. (図 9) 形をなす.

大正十年五月十一日　観察

コアジサシの飛翔を見る

各務ヶ原飛行場にて三羽のコアジサシ南より北に飛び去るを見る.
是により見れば細畑地内観察の鳥は疑問の点多し.

大正十年五月十二日　各務ヶ原にて
{大正十年五月十五日, 廿二日両日　細畑地内にて三羽の飛翔を見る. 五月卅一日　同じく地内にて一羽の飛翔捕食するを見る. }

アオバヅクの初鳴期に就きて

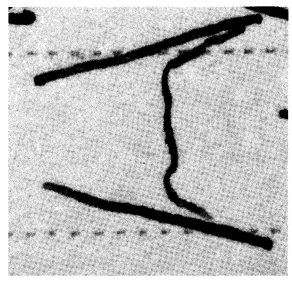

図 9. 観察した鳥類が滑走する時の尾の形状.

夜八時頃西方にてアオハヅクのポッポッポッの鳴き声を聞く.

大正十年五月十四日　夜, 研究室にて

ササゴヰの初見

細畑地内の田[圃]中にて一羽のササゴヰ何か啄ミ西方に飛翔するを見る.

二三日前にも一寸と同地点にて一見した様にも思ふ.

大正十年五月廿一日　細畑地内西浦にて観察

ホトトギスの鳴き声に就て

昼過ぎ新家の藪中又其の隣家の松の木にて鳴くのを聞く. 其の鳴き声はホンゾンカケタカと鳴く様に聞け, 又テッペンカケタカとも聞ける.

人によりトントンカケタカ, キュンキュンキキュクキユン, 聞ゆと.

然し終りのカは強く弱く一定せず尚又時々キュクキュクキュクと鳴きつつあるときに云うことあり. 此はなきぞくないか.

夕方漸く本体を見出す. 新家の隣家の松の木にて現はる. 体は腹は白色に横斑あり. 尾は灰色に白斑のあるをよく見る.

背は観察者と又対面に有れば良く見へざれと飛び立ちし時に見れば濃灰色に見ゆ.

頸は淡けれど頭部は濃く見ゆ.

脚は黄色, 嘴は下顎は黄色, 上顎は暗黒色に見ゆ.

体色は強雨中の観察なれば十分とは□きれず成分の淡さ計られず. 捕食の有様は松に居り鷹の如く静居し頸を左右上下に回し餌を探す. 一度餌を見れば飛ぶつき啄み来り又其の所にて餌を脚又は枝等につける又はつまむことなく嘴に啄みたるまま左右に打ち振り含み易き様に又それと同時に餌を殺し殺すまでに至らずとも衰へさせ一二度呑み込み他は一呑にす. 餌を食するときに一呑にする. 其の様は実に見事.

少しの時間に松毛虫凡三寸ばかりのものを三匹捕食した. 少しの時間に三匹も食する故一日には何匹食するか実に多くであろう.

雨が体にかかる故時々体を振って居った.

大正十年六月一日　新家の竹藪中にて

今日も同様に鳴き声は聞ゆ. 然し風雨強き為め観察不可能.

大正十年六月二日　新家の竹藪中にて

ホトトギスの鳴き声は昨日を終りとして以後聞かず.

五日記す.

ササゴヰに就て

日頃ササゴヰの羽を見る. 十間程遠方の観察.

背は灰青色, 腹は白色, 顔も白色に眼通線は青黒色. 後頭には青黒の冠毛あり, 脚は黄色, 嘴は上黒色下黄色. 尾をセキレイの如くびとびとと振って居った. 頸を長く又短くして余の方に注意しつつ歩み或は留り後, 遂に飛出す. 飛行線直線飛行中頸を長く伸し或は短く縮める. ゆるやかに翼を打つ. 地に下りんとするや翼を打たず. 頸は伸し滑走の様にて下る.

大正十年六月九日　細畑地内にて観察

モズの鳴き声に就て

今日初めてキチキチキチと云ふ鳴き声を聞く.

大正十年六月七日　下印食の森にて

鶯の鳴き声を初めて聞く

下川手村内境川沿岸の●叢中にてチャチャと続けて聞ゆ. 本年の初めか

大正十年七月下旬　下川手境川沿岸

小椋鳥の来飛に就て

朝一群の小椋鳥東北より来り数十間前の雑木中に入る. 其数凡三十羽.

大正十年八月十七日　細畑, 田道にて

白鷺の群を見る

{中鷺の群に就て}

{九月四日鳥屋敷の東方にて一羽見たる報告を受く. }

大垣の鳥屋敷にて二三羽の白鷺を八月十九日に見る. 必ず烏又背黒ゴイに追はれ松の枝上に止まる. 中鷺らしく嘴黄脚趾黒, 他は白.

七月十七日初めて一羽見しと八月十二日最終見し日よりと云ふ.

大正十年八月廿日　記す

イカルチドリの観察

夕方雨の晴れ間に北方より二羽のイカルチドリ南に又南より東に半円を書き鳴きて行くのを見る. 直線飛行. 翼打ゆるく体に翼を着けず, 鳴き声はキュキュキュキュと聞ゆ.

大正十年九月七日　雨　畑にて観察

カハセミの鳴き声に就て

午後細畑区内吉野神社にてピーピーと鳴く声を聞く.

大正十年十月一日　吉野神社にて

椋鳥の初見の日に就て

午後新家の□の木及東より西に飛びつつある一群を見る.

大正十年十月二日　畑にて

腰赤燕の飛来

朝稲田の上を飛び交ふ六七羽の腰赤燕を見る. 十月中旬頃岐阜地方を去るか.

ヒヨドリの渡り

二羽のヒヨ鳥東より西にピイピイと鳴き飛び行くのを見る．本年の渡りの初め，四十雀，メジロの鳴き声を聞く．

大正十年十月十六日　畑にて

鶫類に就て

岐阜元町熊田氏の言によれば十月十五六日頃にはシロハラ，マミチャジナイ，鶫に少しクロツグミを混じて富山より送り来ると．本年は十五六日頃に十五六羽のクロツグミありと云ふ．ツグミは一羽も混せず．次第にツグミを混じて終にはツグミのみになり．シロハラ，マミチャジナイの跡を□つと云ふ．

十一月三日頃は一番盛に送り来ると云ふ．

余の観察によれば百羽の送り来りし鶫類の内マミチャジナイ十五羽，クロツグミ二羽，シロハラ五羽，他はツグミなり．次第にツグミの多くなり始めか，今日迄で岐阜在近にては鳴き声を聞かず．

大正十年十月廿五日

ビンズヰの鳴き声に就て

稲田中より二三羽ツツリーツツリーツツリーと鳴き飛び出す．

大正十年十一月一日　田にて

ジヨビタキに就きて

日頃庭にジヨビタキ一羽来り鳴く．来期は十月の下旬．

大正十年十一月一日　家にて

本県で取った燕の巣の数に就きて

大正十年六日新愛知新聞岐阜日報の切抜．

{本県で取った燕の巣の数

本県にては本年度に於て燕の巣台方を奨励せし結果本年は合計八万八千八百廿一台を給与せしが前年に比較すれば一万八千三百卅五台の増加を見た内訳を示せば左の如し．

都市別	本年	前年より増加
稲葉	四，七五七	八一二
羽島	四，九九三	二，一八一
海津	三，五三三	九九八
養老	三，四五三	五九八
不破	二，二三二	三八六
安八	三，四三一	六二九
揖斐	五，四二三	八五四
本巣	六，五九三	一，二四七
山県	二，五〇九	五三八
武儀	七，四一七	一，六六三
郡上	七，八九一	一，二二四
加茂	七，一六六	一，三一一
可児	七，八二〇	九七〇
土岐	二，一〇二	九一〇
恵那	一〇，六四九	二，〇五七
益田	三，二三一	五〇一
大野	二，一〇〇	六二四
吉城	二，九二一	九四五
大垣	三九九	一九〇
総計	八八，八二一	一八，三三五

因に岐阜市のみは調査中で不明なるが一巣当り平均四羽づつ成育し居ると看做せば実に卅五万五千五百羽を保育せしめた訳である．}

鶫の初鳴きを聞きし日

十一月十日切通地内にて種は明ならざれど鶫の初鳴を聞く．

大正十年十一月十日　切通の桑畑中にて

燕クモの糸にかかる

時は大正十年六月頃と思ふ．朝宅前の電柱にぶらさがり死したるが如き様をして居るを見る．クモの糸に片翼を巻き自由を失ひて垂下して居るのであった．竹竿にて糸を払得ば直ちに飛び去る．

大正十一年二月　思ひ出でしまま記す

メジロに就きて

二月中旬より三月中旬に盛に庭樹に来り椿の密[蜜]を吸ふ．囀るものもあり．

大正十一年三月十一日　記す

雀の巣に就きて

今日領下の遠藤惣兵衛方肥料倉の軒に雀営巣を見た．本年の最初か．子供が取らんとすると他の子供が卵があるので止せと云ふって居った．余は自転車にて通行中の観察．

大正十一年三月十四日　街道にて

燕の初見日に就きて

細畑地内の畑道にて正午すぎ燕の一羽飛ぶのを見る．本年の最初か．昨日腰赤燕を加納久保見にて小野木縫之助見たと云ふ．之本年の最初か．

大正十一年三月十八日　観察及聞きしまま

背黒せきれい及雲雀の鳴き期に就きて

三月上旬より中旬の始めにかけて背黒せきれは鳴き始め雲雀は二月下旬より始む.

大正十年三月十八日　研究室にて

鵙の雛に就きて

夕方の新家の小僧, 鵙の雛一羽を持ち来り余に示す. 見れば孵化後二週間を経し様なり. 何時構巣せしものか遅くとも二月廿五六日には構巣産卵せしものならん.

巣は竹藪中竹の南に差し出てたる日当りを選びしも構巣の早き為めと思ふ. 材料は雞の羽毛及禾本類にて綴る. これまでの鵙の巣とは大異あり. 即ち居所により構巣の材料の異る事此の例にて明なり. 竹藪の其一面は雞の住む所である.

大正十一年三月廿日　研究室にて

{鳥の趾ノ各種名称

弁足	カイツブリ
併趾足	カハセミ
搦足	ナイリツバメ
行足	ツグミ
攀足	キツツキ
旋鉤足	ヅク
鉤足	タカ
坐足	キジ
渉足	ゴイサギ
走足	タシギ
蹼足	カモ
全蹼足	ウ

以上中時標本ニセル

大正八年三月四日

尾ノ標本各種名称

平尾	カモメ
円尾	トラツグミ
楔状尾	キツツキ
燕尾	ツバメ
凹尾	ホホジロ
凸尾	モズ
鋏尾	アジサシ
尖尾	キジ

趾

対趾足	キツツキ
皆前趾足	アマツバメ
合趾足	カハセミ
蹼足	カモ
缺蹼足	シロアジサシ カモメ
半蹼足	シギノ一種
全蹼足	ウ
弁足	カイツブリ}

考　　察

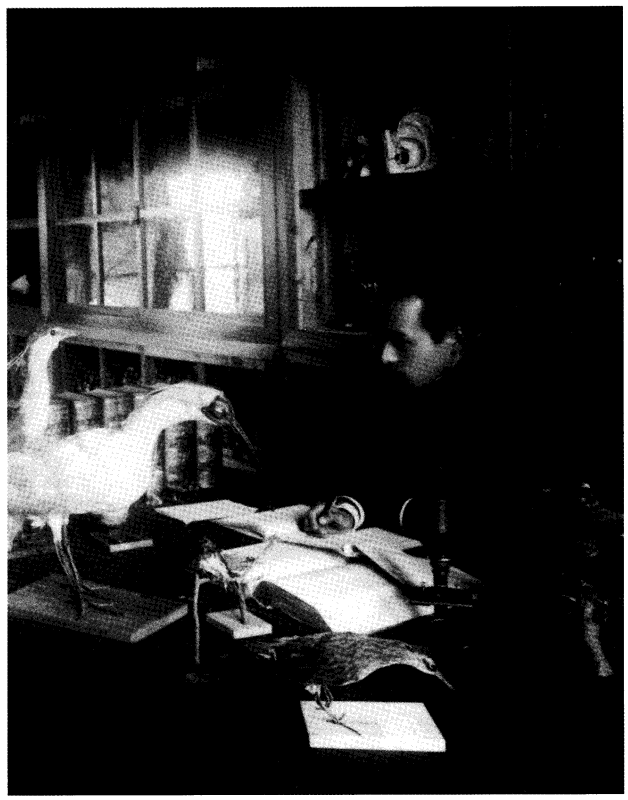

図 10. 長森尋常高等小学校（現在の長森南小学校）でトキ *Nipponia nippon* の剥製を観察する柳原要二.

（1）特筆すべき鳥類の観察記録

日誌には, 大正 3 (1914) 年 1 月 1 日から大正 11 (1922) 年 3 月 20 日まで, 岐阜市長森細畑の自宅周辺で観察された鳥類の生態が記されていた. メジロ *Zosterops japonicus* など, 岐阜周辺で普通に見られる鳥類の行動観察の記述が多いが, トキ *Nipponia nippon* など, 現在, 岐阜県では確認できない鳥類の記録もあった.

トキ *N. nippon* については, 大正 7 (1918) 年 1 月 15 日に武儀郡神淵（現在の加茂郡七宗町神渕）で捕獲された個体の解剖所見が日誌に記述されていた. 柳原は, 捕獲の 3 日後, 長森尋常高等小学校（現在の長森南小学校）でトキ *N. nippon* の胃内容物等を調査した(図 10). 後日, 柳原は, このトキ *N. nippon* の記録を日本鳥学会に投稿した(柳原, 1918). 岐阜県におけるトキ *N. nippon* の分布情報は, この記録以外に報告されていない（日本野鳥の会岐阜, 2012）.

ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis* については, 大正 7 (1918)年 7 月 26 日, 27 日, および 29 日の観察記録が日誌に記述されていた. 柳原は, 羽島郡三宅（現在の羽島郡岐南町三宅）で, 長森尋常高等小学校（現在の長森南小学校）の児童とともに, 営巣中のヨシゴイ *I. sinensis* を観察し, 卵（図 11）と巣を採集した. 日誌が記された時期では

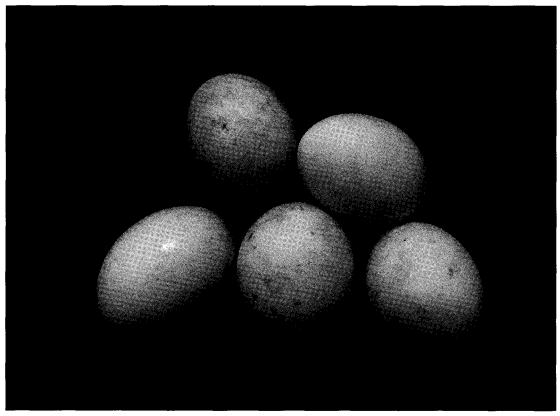

図 11．大正 7 年 1 月 15 日に羽島郡岐南町三宅で採集されたヨシゴイ *Ixobrychus sinensis* の卵．

ないが，柳原は，大正 11 (1922) 年 10 月 27 日に岐阜市黒野で採集されたヨシゴイ *I. sinensis* の仮剥製を標本商の熊田から購入していた（説田・時田，2001）．岐阜県におけるヨシゴイ *I. sinensis* の記録は 9 件で，平成 15 (2003) 年 7 月 5 日以降，観察されていない（日本野鳥の会岐阜, 2012; 説田・時田，2001）．柳原が鳥類の標本収集や研究を行っていた明治後期から昭和初期にかけては，本種の繁殖に適したヨシ原が多く残されていたのであろう．

岐阜県におけるサンカノゴイ *Botaurus stellaris* の記録は 2 件あり，海津市（大正 10 (1921) 年 3 月 8 日）と大垣市（昭和 5 (1930) 年 12 月 27 日)で捕獲された標本である (日本野鳥の会岐阜, 2011)．これらの標本は，柳原が岐阜市の標本商，熊田から購入したものである（説田・時田，2001）．このうち，前者の標本は日誌の執筆時期に捕獲されているが，記述はなかった．

岐阜県におけるヒメクイナ *Porzana pusilla* の記録は 3 件あり，最も古いものは，大正 7 (1918) 年 6 月 4 日に岐阜市細畑で柳原要二が捕獲した標本の記録である（日本野鳥の会岐阜，2011; 説田・時田，2001）．この標本も日誌の執筆時期に捕獲されているが，記述はなかった．

（2）柳原要二と親しかった同好者と標本商

日誌には，鳥類の観察情報や標本の提供など，柳原要二と親しかった同好者（小野木縫之助，小木曽現八）や標本商（熊田）とのやりとりが記述されていた．これらの人物の経歴等，詳細は分からないが，寄贈標本には，彼らから提供を受けたものが含まれている．これらには，小野木縫之助採集のものが 27 点，小木曽現八採集のものが 6 点，岐阜市元町の標本商，熊田から購入したものが 352 点ある（説田・時田, 2001）．柳原要二が鳥類研究者，籾山徳太郎に提供した標本は，現在，公益財団法人山階鳥類研究所に 17 点保管されている．これらには，小木曽現八採集のものが 3 点，熊田から購入したものが 5 点含まれている（説田・小林・平岡, 2013）．柳原に標本を販売していた岐阜市の標本商，熊田については，日誌や寄贈標本のラベルでは，『熊田』，『熊田氏』あるいは『熊田方』と記されているだけで，苗字以外は不明であった．しかし，山階鳥類研究所が保管する標本のラベルには，『熊田万吉』，『saikichi（注: おそらく Mankichi の誤記） Kumada』，『Mankichi Kumada』あるいは『Mankichi Kumada (熊田万吉） Sent by Mr. Yodi Yanagiwara（注: Yoji Yanagihara の誤記）』と記され（山階鳥類研究所, 2011），柳原家に出入りしていた標本商，熊田のフルネームは熊田万吉であることが分かった．

謝　　辞

貴重な鳥類標本及び日誌を寄贈していただいた岐阜市の故柳原亮一氏に感謝を申し上げます．

文　　献

日本野鳥の会岐阜, 2012, 岐阜県鳥類目録 - 2012 - ,123p.

説田健一, 2013, 岐阜県博物館が所蔵する折居彪二郎採集の標本と書簡について．折居彪二郎研究会，鳥獣採集家折居彪二郎採集日誌～鳥学・哺乳類学を支えた男～．一耕社，苫小牧, 584-588.

説田健一・小林さやか・平岡考, 2013, 旅するアカコッコ～籾山徳太郎が同好者と交換した八丈島産鳥類標本の行方を探る～．日本鳥学会 2013 年度大会講演要旨集.

説田健一・時田賢一, 2001, 柳原要二鳥類コレクション標本目録．岐阜県博物館研究報告 **22**, 22-68.

説田健一・時田賢一, 2005, 明治から大正にかけて活躍した標本商，長與について．岐阜県博物館調査研究報告 **26**, 35-44

説田健一・齋藤郁子, 2003, 折居彪二郎から柳原要二への書簡について．岐阜県博物館研究報告 **24**, 17-27.

柳原要二, 1918, 美濃にて獲られしトキに就て. 鳥 **2** (6), 54.

柳原要三, 1922a, 日本鳥類の巣及卵（Ⅰ）．動物学雑誌 **34**, 666-670.

柳原要三, 1922b, 日本鳥類の巣及卵（Ⅱ）．動物学雑誌 **34**, 712-717.

山階鳥類研究所, 2011, 山階鳥類研究所　標本データベース 〈http: //decochan.net/index.php?p=1〉, (2013 年 12 月 26 日)．